ベルニーニのルーヴル宮設計に対するフランス側からの要求

「騎士ベルニーニのフランス旅行日記¹」に見られるベルニーニのルーヴル宮設計活動 その2

REQUESTS OF THE FRENCH COURT TO BERNINI'S DESIGN FOR THE LOUVRE PALACE

Bernini's design for the Louvre palace considered through the "Journal du Voyage
du Cavalier Bernini en France" (Part II)

遠藤 太郎*

Taro ENDO

This paper deals with requests of the French Court to Bernini's design for the Louvre palace. The principal object of the requests was to preserve the ancient buildings and to make the King's convenient and comfortable apartment. But the preservation made it impossible for Bernini to prepare the required apartment. After canceling Bernini's design, Colbert criticized Bernini for not sufficiently taking King's apartment's convenience into consideration. But the failure of the design was partly caused by the client's contradictory requests.

Keywords: Louvre, Giovanni Lorenzo Bernini

ルーヴル、ジョヴァンニ・ロレンツォ・ベルニーニ

はじめに

本研究は、ベルニーニによるルーヴル宮の設計活動を、ベルニーニのパリ滞在期間中(1665年6月2日～10月20日)彼の通訳を勤めたシャントルーの日記²(以下単に「日記」と記す)をもとに分析し、その設計のプロセス及びその設計案の却下の原因を考察するものである。ベルニーニ来仏以前の経緯を取り上げた前稿³では以下のことを論じた。

1) ルーヴル宮の建設を取り仕切っていた当時の建築総督コルベールには、1人の建築家による1つの作品としての建築という考えが薄く、むしろ彼はたくさんの設計案を集めてその良い点をまとめてより良い設計を実現しようとした。

2) さらにコルベールは、設計の全てに明瞭な根拠をもとめ、それによって細部にまで踏み込んで建築家と議論し、自分自身が積極的に設計に介入しそれを管理しようとした。

3) 以上のことでベルニーニから幾分反発を買っていた。

本稿ではベルニーニのパリ滞在期間(1665年6月2日～10月20日)を取り上げるが、明らかにしたいのは以下の点である。

1) フランス側のルーヴル宮の計画の全体像。

2) ベルニーニに示された幾つかの要件。

3) フランス側の計画の全体像ははっきりしていなかったこと及び諸要件間に矛盾があったこと。

4) それによりベルニーニの設計がうまく進まなかったこと。

ベルニーニの設計案に関して当事者間で繰り返し議論の対象となった問題に、王のアパルトマンの居住性があつた。コルベールは設計案の却

下の理由をシャントルーに説明した際にもそのことを挙げ、ベルニーニが実際的な問題にまじめに取り組まなかったと述べた。ベルニーニが実際的な問題を軽視しがちだったことは既往の研究でも良く認められていることである⁴。しかし王のアパルトマンについての当事者達の議論の流れや、その設計がうまく進まなかった原因については十分論じられていない。本稿において、王のアパルトマンの計画の難航の原因が、ベルニーニのその問題に対する無関心以外にもあつたことを明らかにしたい。

1. パリでの新しい設計の開始

ベルニーニがフランスに招聘された際の正式な理由は、王はベルニーニと会ってベルニーニがローマから送った設計案について話したい、というものであつた⁵。つまり新たに設計案を作るためにパリに来てほしいとは言っていない。ただしローマから送られた設計案に対しては修正要求が送られていたのであり、フランス側としては新しく設計してもらうか少なくとも修正してもらうつもりであつた。

ベルニーニは、ローマからの道中ずっとルーヴル宮のことを考えていた、と言っている⁶。パリに来て恐らくすぐの頃、ベルニーニはこうも述べている。イマジネーションが沸くので、パリに着いてから眠れていない⁷。これらの発言から見て、ベルニーニも十分設計するつもりであつたと考えられる。ローマに送られた修正要求に対して不快感を示したベルニーニではあつたが、パリにおいては、現場を見られたこともあり、アイデアは出てくる、という状態だったようである⁸。

* 横浜国立大学中核的研究機関 研究員・博士(工学)

Researcher, Core Research Center, Yokohama National University, Dr. Eng.

2. フランス側が提示していた計画の要件

(2-1)敷地の選択

当時の既存のルーヴル宮は西翼と南翼、及び北翼の西半分が完成しており、東翼はその半分が2階まで作られた状態で中止されていた(図1参照)。ベルニーニがローマから送った第1案も新しく設計した東翼を既存部分に繋ぐというものであった。大きな四角形を完成させる事が以前から懸案となっており¹⁰、東翼を作って方形中庭を閉じることが1つの目標であった。

図1、当時のルーヴル宮の状況(斜線は未完成部分)

図2、ベルニーニ、ルーヴル宮第3案平面 (Schiavo, Armando: Il viaggio del Bernini in Francia nei documenti dell' Archivio Segreto Vaticano, in "Bollettino del Centro di Studi per la Storia dell'Architettura", n.10, 1956, p.57による。この平面は、建築家で版画家のマロ Marotによる複製である。マロが平面図を写したのは9月24日以降であるが、その際写された元の平面図がベルニーニのパリ滞在期間中のいつ作成されたものだったのかははっきりしていない。平面図の提出について、「日記」は6月20日の提出にしか言及していないが、本平面図には既に新しい西翼が描かれているため、西翼の仕事が依頼された7月1日以降に作成された平面図が元になっていることが分かる。)

しかし、必ずしもその目標にこだわらずに設計させることも考えられたようである。「日記」によると、1665年6月2日¹¹にパリに到着したベルニーニは、3日コルベールに連れられてパリ市内の要所¹²を見学して回る。ベルニーニによれば、これは建設用地を他に探すためであった¹³。8月11日にはベルニーニは、以前コルベールは、王は全てをベルニーニにゆだねている、サン＝ジェルマン＝ロクセロア教会(ルーヴル宮の東側にある)の取り壊しも含めて、と述べたと語っている¹⁴。さらに9月7日のシャントルー

との会話の中で、ベルニーニは、彼がローマにいたときフランスから帰ってきた枢機卿キージ¹⁵から、王はベルニーニが何の拘束も受けずに作った計画案を欲していると聞かされた、そのことを彼の大臣達¹⁶はベルニーニに伝えていなかったが、と語っている¹⁷。このあたりではベルニーニには非常に大きな自由が与えられていたことになる¹⁸。

しかし実際の設計は既存のルーヴル宮に基づいておこなわれた。6月7日から設計の作業を開始したベルニーニは、9日、自身のルーヴル宮の設計に対する姿勢を表明する文書を読み上げる。その要点は以下のようである。

- ・王は若くて時代は平和であり、大きな建物を作る好機であるが、フランス人は冷静でなく、その平和は長続きしない。
- ・大きすぎる建設のためにはパリ市街を取り壊す必要があり、それには費用と時間がかかる。しかし王はその完成を早く見たいだろう。
- ・以上のことから、あまりに途方もない計画は無理である¹⁹。

9月7日のベルニーニの発言によると、これらの考えはもともとコルベールとの話し合いの中でベルニーニによって表明されたもので、それを文書化するようコルベールが指示した、ということである。敷地の選択さえ自由であったことから考えるとかなり控えめなものになっているが、コルベールから何らかの説得があったのかもしれない。ベルニーニ自身は、シテ島の中に建てるなどということはたくさんの住居の取り壊しを伴うので、既存のルーヴル宮に基づいて設計することにした、と述べている²⁰。

こうしてベルニーニのパリでの設計も既存のルーヴル宮の増改築という形で行われることになった。

(2-2)既存部分の保存

6月4日、コルベールはベルニーニをサン＝ジェルマンの宮廷に連れていき、王に挨拶させる。このときベルニーニはルーヴル宮に関して、ローマからパリに来る間に幾つかの宮殿を見てきたが、フランス王のためにはそれらのどれよりも立派なものを作る必要がある、些細なことは言わないで欲しい、と述べる(最後の部分は、ローマのベルニーニに送られた、設計案に対する細かな所見のせいで出た発言であろう。この部分は王に向けてではなく王の周りにいた人達²¹に向けて言われたものである)。それに対して王は、既存部分を壊さなければ立派なものが出来ないのなら取り壊しもやむを得ない、と答えたが、一方で王の先任者達が作ったものを保存したいという気持ちも表明した²²。ベルニーニ来仏以前にコルベールが書いた指示書の中でも、王の意向として既存部分の保存が挙げられていた²³。

既存の建物を壊したくないという王の要望はヴェルサイユ宮においても表明されるもので、そちらではより強く主張された。王がルーヴル宮においては一応取り壊しもやむをえないとした理由には、ルーヴル宮にはヴェルサイユ宮と違って周辺の空間的なゆとりがなかったことや、王がベルニーニに対してとくに敬意を抱いていたこと等が考えられるだろう。

既存部分の保存の理由には、それに対する愛着、すでにあるものをわざわざ壊して無駄にしてしまうことへの躊躇などがあり、さらにベルニーニが外国人だったために、ナショナリズムも関係してきたはずである²⁴。

この問題に対してのベルニーニの考えは彼の7月22日の手紙の中に以下のように表明されている。

- ・何も壊さずに立派なものを作ることができればより賞賛されるだろう。
- ・王はベルニーニに向かって、出費はあまり気にしない、しかし既存部分を残したい、と話した。
- ・そのため既存部分をほとんど壊さないように設計した²⁵。

こうしてベルニーニは既存部分の保存に気遣いながら設計を進めた²⁶。

(2-3)王のアパルトマンの居住性向上

計画の具体的内容でコルベールが重視していたのは王のアパルトマンの居住性と利便性であった。当時の王のアパルトマンは将来の大きな四角形の南西角の王のパヴィリオンに2階に置かれていたが(図1、2参照)²⁷、あまり快適な住居ではなかったようである²⁸。

ベルニーニの来仏以前から王のアパルトマンの配置(ベルニーニはそれを東翼に置いた)は問題となっていた。ルーヴル宮は冬の住まいであるから王のアパルトマンには南向きの十分な開口が必要であり、しかも東側は騒音が激しい、そのため東翼には置けない、というのである²⁹。

ベルニーニはパリでも、王の主たるアパルトマンを東翼に置き、コルベールの要求になかなか応じなかった。

(2-4)その他の要件

安全性

ローマに送られた指示書の中では、安全性への配慮が求められていた。動乱にさらされる大都市の中心にある宮殿であるため、入り口は簡単に近づけるようなものではないけない、というのである³⁰。

これに関してパリで問題となったのは、まずベルニーニが玄関に設けた柱廊であった。コルベールによれば、それはテロリストの隠れ場所になるので危険であった³¹。ついで雨水だめを地下に作るという提案に対して、またコルベールはそこに人が隠れるのでは、と難色を示す³²。この2つの問題にベルニーニがどう対応したのかは不明である。

東前面の広場

ローマから送られた第2案においてベルニーニは東翼を、中止されていたル・ヴォーによる東翼より東に前進させていた。それは周辺の建物の買収とそれによる出費を伴うため批判された。これが来仏後も問題になる。

7月15日、コルベールは東前面の広場についてベルニーニと話し合った。ベルニーニは東立面を見るにはその高さの1.5倍の距離があれば良く、それよりずっと広くなるだろうと述べる。コルベールはそこに衛兵隊詰所やその他必要な宿泊施設を作ろうという³³。次いでコルベールは30日、ベルニーニに向かって以下の2つの不安を表明する。

- ・広場の面積。さまざまな軍隊を収容し、それらを並べたり教練をおこなうだけの面積があるか。
- ・基礎の位置の確定。基礎の作業は河川の水位の低い今のうちにおこないたいので、どの建物を買収しなければならないか決定するために正確な位置を早く知りたい(買収には手続きが必要で困難が伴う)³⁴。

これに対してベルニーニは、既存の建物の不正確さ(四角形全体が正確な四角になっていない)の修正³⁵のために手間取ったので時間がかかるのは仕方がない、と答える。基礎の位置は8月1日に確定された³⁶。

8月4日、ベルニーニはシャントルーに向かって広場について説明し、幅が約170m、奥行きが同じく67mと述べる³⁷。しかしコルベールはまだ不安を感じており、そこに集まるたくさんの馬車が収容できるか知りたいので広場の図面を作るよう、5日ベルニーニに指示し³⁸、11日には王とコルベールがその図面を確認した³⁹。その後この話題は出てこない。

ベルニーニは東翼を前進させて、方形中庭(4隅の階段のため十字形になっているが)と東翼の間に小さな中庭を2つ作っている。ベルニーニ自身はその理由を述べていないが、ローマから送った設計案で風通しや採光の悪さが批判されたためであるとも考えられる。ベルニーニの設計図を見たマンサールは、その小さな中庭があるおかげで食事関係の仕事場が方形中庭に面さなくなるので大変都合が良い、と述べたらしい⁴⁰。

主入口の大きさ

ローマから送られた第2案は、大きな宮殿の割にはその主入口が小さいと批判された(第2案では1階はルスティカの施された基壇として表現されており、中央にアーチのついた入口が開けられていた)。

第2案の入り口の小ささに対する批判が美的な観点からなされたのか実用的な観点からなされたのかは分からないが、パリではコルベールは、この問題を実用的なものとして取り上げた。コルベールが7月15日、方形中庭に催し物のための機械装置などを入れるための配慮を求めると、ベルニーニは、それが可能なほど入口を大きくはできないが、装置は分割して通せば良い、と答える⁴¹。その後この話題は出てこないが最終的な設計では多少入り口が広げられていた⁴²。

なお他に、ローマに送られた指示書ではパリの気候下では陸屋根は不適切であると指摘されていたが、ベルニーニがパリに来てからは議論されなかった⁴³。

3. 6、7月の設計図の提出と計画の拡大

ベルニーニと依頼者側双方のルーヴル宮の計画に対する姿勢は以上のようなものであった。

「日記」によると設計の仕事は6月7日に開始された⁴⁴。先ほど触れたように、ベルニーニは6月9日、ルーヴル宮の設計に対する彼の姿勢を表明したが、続いてその後、以下のように具体的な説明をおこなっている。

- ・東翼に、利便性と壮麗さを伴った王室用の2つのアパルトマンを作った。
- ・2つのアパルトマンは既存の建物に結合される⁴⁵。

しかし19日に設計図を見たコルベールは不満を示す⁴⁶。王の主たるアパルトマンが東南のパヴィリオンに置かれているが、そこは騒音が激しいというのである。ここで指摘された問題はローマから送られた設計案に対するものと同じである。コルベールによれば、王のアパルトマンは当時あった位置(王のパヴィリオン)以外の場所には置けないのであった⁴⁷。しかし翌20日、サン＝ジェルマンの宮廷の王に設計図が提出されると、王は全てを気に入り、西立面の設計も依頼する⁴⁸。

7月1日にはコルベールは西立面を見て、その高さを問題にする。その西立面は東立面と同じほど高いが、それより低いギャラリーなどの建物(西翼に繋がる)と適合するために調整が必要であるというのである⁴⁹。

さらにこの日コルベールはベルニーニに主階についての指示書を渡ししている。「日記」にはそこに置かれるべきものとして、大きな礼拝堂、饗宴のための広間、絵画や彫刻のための部屋が記されているが⁵⁰、コルベールの書簡集にはおそらくこれと同一と思われる指示書が掲載されている⁵¹。そこでは内部の部屋以外についての、「日記」では記されていない以下のような指示も出されている。

- ・南北立面をもう少し東立面と調和させること。それは壁を高めて東立面と同じ欄干や彫刻を付けることで達成されるだろう。それが屋根を隠して更なる美をもたらすであろう。方形中庭にも同じ処置が必要である。
- ・王が欲しているように、西側に新しい立面を作り、王や衛兵の住居を作るために西翼を2重にすることも必要であろう⁵²。

ここではベルニーニが設計した部分と既存部分との調和が問題になっている。これは新しく指摘された問題である。

西立面は7月5日に宮廷の王に提出された⁵³。

ベルニーニは翌6日、ルーヴル宮の対岸にある四国学院⁵⁴の広場からルーヴル宮の南立面を眺め、それを東立面に見合うように調整するよう指示された、と述べる⁵⁵。12日には方形中庭の立面が提出され、それは他のもの以上に王の気に入った⁵⁶。19日には南立面(既存の建物を壊さず

に立面を改修するもの)が提出され、王はそれを東立面と並べて持たせて角の印象を確かめた⁶⁷。

4. 更なる計画の拡大⁶⁸

以上見てきたのはルーヴル宮本体についてであったが⁶⁹、8月19日に渡された指示書では以下のような仕事も付け加わる⁶⁹。

- ・ルーヴル宮とチュイルリー宮の間に建てられる劇場のようなもの。
- ・ルーヴル宮の中か外に建てる図書館。

コルベールの書簡集に載せられた指示書ではその他にも以下のようなものが挙げられている⁶¹。

- ・ルーヴル宮の中か背後に200～300人収容できる衛兵隊詰所。
- ・川向こうの四角く大きな広場とその中央のモニュメント。
- ・セーヌ川にかかる石橋。
- ・門⁶²。
- ・オペリスクあるいは円柱を立てる場所。

重要なのは最初に挙げた劇場である。コルベールは依頼の際、ルーヴルとチュイルリーの2つの宮殿の間にできる大きな空白を埋められるようなものでお祭りや馬上試合に使えるもの⁶³、とか、2つの宮殿の間で美しく、大きくそして壮麗に作られうもの全て⁶⁴、と言っている。どのような規模が想定されていたのか分からないが、「日記」によれば図面に描かれており、巨大な建物になった。それぞれルーヴル宮とチュイルリー宮を向いた2つの面を持ち、いずれの側も1万人を収容できる。幅はルーヴル宮より大きく、中央部には外国の君主の宿泊施設を持つ⁶⁵、とある。

ルーヴル宮本体の建設のための敷地の買収費用ですら心配されていたことを考えると、これらの計画の実現性は疑わしかったはずだが、そのような仕事がベルニーニには依頼された。

5. 計画の拡大の原因

こうして、ルーヴル宮自体も東翼の設計にはとどまらない計画になり、付属建築物も合わせるとかなりの大計画ということになった。

このようなことになった原因は、まず依頼者側において計画の全体像がこの時点ではそれほど固定していなかったということである。大きな四角形を閉じるという目標はあったものの、何か良いアイデアがあれば変更され得るという状況であった。ついで、せっかくなベルニーニを呼んだのであるから出るだけのアイデアを出してもらおうという考えもあったであろう。前稿で見たように、コルベールはいろいろな建築家に意見を聞いたりアイデアを出させるのが癖であった。劇場のなどはその種のものと考えられる。

また長期的な建設を考えていたのなら、初めに大きな計画を立てて、実施は部分的に進めてもいいことである(ただし先に見たようにコルベールは着工はなるべく早くしたいと考えていたが)。

さらに王がベルニーニの設計を気に入ったこともあった。西翼の依頼は王が直接おこなっており、コルベールとしては予定外だった可能性もある。しかし、コルベールにとっては、王の気持ちをルーヴル宮に向けさせるにあたってベルニーニは重要な手段であり、なるべく王の気に入るようにさせたかったはずである。

6. ルーヴル宮の構想における矛盾

王のアパルトマンの位置について、なぜベルニーニはコルベールの要求を受け入れようとしなかったのであろうか。

ベルニーニはローマから送った設計案でも王のアパルトマンを東翼に置

いていた。第1案においては既存部分には手はつけられず、ベルニーニが設計したのは北翼の東半分、東翼及び中庭を巡る柱廊だけであった⁶⁶。しかしフランス側から、王のアパルトマンは東翼におかれるべきではない、とされた。第2案の平面は知られていないが、それに関するコルベールと教皇大使の話し合いから、ベルニーニは南翼の幅の2重化による既存の王のアパルトマンの拡大を提案していたこと、コルベールはそれによって既存の建物が改変される点及び南側の庭が狭くなる点を批判していたこと、がわかる⁶⁷。フランス側から最初にベルニーニに与えられた指示がどのようなものであったのかが分からないが、この条件では王のアパルトマンを設計する余地が無いとも思える。

6月20日に提出された平面でまた王の主たるアパルトマンが東翼に置かれたことに対してコルベールは不満を述べたが、王が設計を賞賛したこともあってか、ベルニーニは対応をとらなかったものと見られる。そのためコルベールは8月19日の指示書でその問題を取り上げた。以下のことが指摘されている。

・ベルニーニは1年の全ての季節のためにそれぞれ非常に大きなアパルトマンを用意したが、王がルーヴル宮で過ごすのは冬であり、冬のアパルトマンが最も重要である。

・唯一使われ得る南向きのアパルトマンは現在のままになっており、つまり出費は無駄ということになる⁶⁸。

「日記」ではこの指示書にしたがって作業がなされたという記述があるが、王のアパルトマンの配置はそのままだったようである。この問題が解決するのはベルニーニがバリエを離れる前日であった。10月15日、コルベールは王のアパルトマンが狭すぎるとして拡大を求めた⁶⁹。それに対してベルニーニは18日、耐力壁 *un gros mur de refend* の移動を提案する⁷⁰。それを聞いたコルベールは、それが大変な混乱を引き起こすだろうと述べる⁷¹。ベルニーニが19日に王のパヴィリオンの拡大(それまで3スパンだったものを4スパンにする)を提案すると、ついにそれに対してコルベールは完全に満足した、と述べる⁷²。

このように非常に簡単な解決策(しかもこの策は第2案と似ている)にたどり着くのに大変な時間がかかっている。なぜかといえば、既存部分を保存することと王のアパルトマンを快適にするということは合い入れないものを持っていたからである。ベルニーニが東翼に王のアパルトマンを置いたのは、既存部分に手を付けずに王に広い住居を提供する自然なやり方であった⁷³。

さらに、王のパヴィリオンの拡大(既存部分の取り壊しを伴う)に賛成していることから考えて、コルベールは王ほどには既存部分の保存を重視していなかったようにも見うけられる。この依頼者側内部での方針の不統一が解決を遅らせた。

こうして一旦は解決を見た問題であるが、どちらかがまた気を変えたようであり、ベルニーニがバリエを離れた後に作成された平面では王のパヴィリオンは拡大されていない。その図面に基づいて作られた模型を見たコルベールはまた、王のアパルトマンに問題があると言う⁷⁴。ベルニーニ案の却下の後にも、その設計の問題点としてコルベールは、費用の割には、王のパヴィリオンに置かれた王のアパルトマンが昔と変わらず狭いままだった、という点を挙げている⁷⁵。

また、ベルニーニの設計が既存部分を見えなくしてしまうものになったことは、シャルル・ペローが強く批判し、彼がベルニーニの設計を実施しないようコルベールを説得する際の論点であった⁷⁶。既存部分を隠したことがフランス人達の気分を害したかもしれない。

しかしベルニーニがパリに来て初めに設計したのは東翼のみである。それ以外の翼に手をつけることはまず依頼者側からの要求であった。コルベールの指示書では壁を完全に覆うことまでは要求されていなかったが、方形中庭や南北立面に、東翼と同じ装飾を付けて(壁を高めて欄干や立像を付けて)それと調和させることが要求されていた。

一方ベルニーニはそれほど調和の問題を気にしていなかった(あるいは不調和はないと思っていた)。先に見たように、ベルニーニのパリ滞在中にその調和の問題が最初に指摘されたのは西翼の設計が完成したときであった。コルベールは高い西翼と低い既存のギャラリーとの不調和を嫌ったのであった。そのときベルニーニは、そのことは問題ではなく、ルーヴル宮本体とギャラリーとの関係は頭と腕の関係と同じようなものであり、サン＝ピエトロ大聖堂(本体と列柱広場の関係)でもそのような設計をおこなった、と述べた⁷⁷。つまりここでもベルニーニが率先して既存部分に手を付けたのではなかった。それはベルニーニによる新しい設計と既存部分との不調和を気にした依頼者側の主導でおこなわれたことである。

このように、既存部分の保存は、当然ながら全体の美的な調和ということとも合入れなかった。しかし全体の不調和を気にして既存部分にも手を加えようとしたのが依頼者側だったことは注目に値する。

結び

以上、ルーヴル宮の全体像はそれほどはっきりしていなかったこと、矛盾した諸条件のもとでの計画であったこと、そのためあつてなかなか設計がまとまらなかったことを見てきた。

コルベールは、ベルニーニが王のアパルトマンの配置や居住性に配慮しなかったと述べた。確かにベルニーニが宮殿内の諸住居の配置に関心を示さないこともあった⁷⁸。しかし、こと王のアパルトマンについては、その計画がコルベールから見て不本意なものに終わったことの責任はベルニーニ一人にあるのではなかった。むしろ既存部分の保存という問題に対する依頼者側内部での(つまり王とコルベールの間での)見解の不統一が、躓きの始まりだった考えられる。

王のアパルトマンの問題に関しては、それは簡単に修正できることで、いずれにせよそのような些細な問題が計画全体の却下をもたらすことはありえない、という指摘もある⁷⁹。さらに、王は肉体的に非常に頑丈であり、王本人はコルベールほどには居住性に関心はなかったであろうとも言われている⁸⁰。実際「日記」にも王がそれを口にすることは記録されていない。

しかし上で見たように、この問題は既存部分の保存との関係で解決が困難になっていたし、客観的に見て些細な問題が、当事者達にとっても些細だったとは限らないであろう。王の気持ちがますますヴェルサイユ宮に向かってしまう状況下、ルーヴル宮の中で王に快適な住居を提供することはコルベールにとっては重要なことであった。

次稿以下でベルニーニの設計案を考察したい。

謝辞

本論文を作成するにあたり、終始懇切丁寧な御指導、御教示を賜りました横浜国立大学工学部 吉田綱市教授に対し、深く感謝の念を表します。

¹ ed.by Lalanne, Ludovic: Journal du Voyage du Cavalier Bernin en France par M. de Chantelou, "Gazette des Beaux-Arts", deuxième période, t.15, 1877, p.181ff.および同誌の t.16, 17, 19-26, 28-32 に掲載、1885 年に単行本として公刊。筆者が参照したのは雑誌に掲載されたものである。

² 注 1 参照。

³ ルーヴル宮の設計に対するコルベールの考え方及びベルニーニ来仏までの経緯「騎士ベルニーニのフランス旅行日記」に見られるベルニーニのルーヴル宮設計活動 その 1、日本建築学会計画論文集、2001 年 2 月。

⁴ Mirot は、ベルニーニの設計案の欠陥の中で、コルベールにとって第 1 のものは、実際的な問題に十分取り組んでいなかったことであった。としている(Mirot, Léon: Le Bernin en France, in "Mémoires de la Société de l'Histoire de Paris et de l'Île-de-France", t.31, Librairie de la Société de l'Histoire de Paris, 1904, p.275)。Hauteceur も、ベルニーニの失敗の原因は実際の要求の軽視だったとしている(Hauteceur, Louis: "Histoire de L'Architecture classique en France", t.2 le Règne de Louis XIV, 1, Picard, 1980, p.282)。Gould はベルニーニとコルベールの建築上の対照的な関心についてのシャルル・ペロー(コルベールの秘書)の指摘(前者は演劇や饗宴のための大きな広間にしか興味がなく、後者は王がどのように住むか、どのようにサービスされるかに関心があった)を追認している(Gould, Cecil: "Bernini in France", Weidenfeld and Nicolson, 1981, p.13)。Del Pesco は、ベルニーニが内部配置を表現と左右対称性に従属させたのは、ル・ヴォーやコルベールの考えとは反対であった、としている(Del Pesco, Daniela: "IL Louvre di Bernini nella Francia di Luigi XIV", Fratelli Fiorentino, 1984, p.74)。

⁵ ed.by Clément, Pierre: "Lettres, Instructions et Mémoires de Colbert", t.5, Kraus Reprint, 1979, pp.505-506。

⁶ Lalanne: op.cit., t.32, p.174。

⁷ ed.by Depping, Guillaume G.: "Correspondance administrative sous le Règne de Louis XIV", t.4, Imprimerie Impériale, 1855, p.552.シャントルーがコルベールに宛てた手紙のなかの記述。

⁸ Gould は、第 2 案に対するコルベールの所見をベルニーニが受け取ったかどうかははっきりしないが、その内容が何らかの形で耳に入ったので、ベルニーニはおとなしく別な案を作ることにした、としている(Gould, Cecil: op.cit., p.37)。

⁹ Clément: op.cit., p.259。

¹⁰ ベルニーニ来仏以前の経緯を前項で取り上げたが、それはベルニーニとフランスとのやりとりが中心であった。ここでルーヴル宮自体のより以前の発展について説明しておく。

1527 年にフランソワ 1 世がルーヴル城を王宮と決めるとき、それは現在の 4 分の 1 の大きさの四角形の、中世風の建物であった。王は西翼を取り壊し、レスコーはルネサンス様式で建て替えた。完成はアンリ 2 世時代の 1550 年で、彼は次いで四角形の西南角に王のパヴィリオンを建てた。南翼も取り壊されたが、それが西翼と同じデザインで完成したのはアンリ 4 世の時代であった。こうしてルーヴル宮は西と南の 2 辺はルネサンス様式、東と北の 2 辺が中世様式の四角形となったが、さらにアンリ 4 世は方形中庭の面積を 4 倍にする拡張を考えた。それを引き継いだルイ 13 世は西翼の北側に時計のパヴィリオン(1624~1625、ルメルシエ)を建て、さらにそれまでの西翼と同じデザインで北側に増築し、それによって西翼の長さは約 2 倍になった。さらに北翼の西半分の新設も開始され、次にルイ 14 世が仕事をした。

¹¹ 滞在の最初の期間(6 月 2~5 日)の日付については、シャントルーは不正確である。「日記」は当時のメモに基づいて後で日記の形にまとめられたもので、シャントルー自身冒頭で、滞在の最初期にはきちんと記録をとっていなかった、と述べている(Lalanne: op.cit., t.15, p.189)。ベルニーニに同行していた弟子のデ・ロッシ(Mattia de' Rossi)の書簡(Mirot: op.cit., pp.205-206)や、同時期にパリに居合わせた教皇大使の書簡(Schiavo, Armando: Il viaggio del Bernini in Francia nei documenti dell' Archivio Segreto Vaticano, in "Bollettino del Centro di Studi per la Storia dell'Architettura", n.10, 1956, pp.31-32)の日付に従う。

¹² ルーヴル宮、チュイルリー宮、シテ島、サン＝ルイ島。

¹³ シャントルーは、コルベールはベルニーニにルーヴル宮を見せるために迎えに来た、と書いている(Lalanne: op.cit., t.15, p.194)。この見学については、シャントルーはどこを周ったのか以外詳しいことは記録していない。建設用地を探すためであれば個々の場所の評価に関してベルニーニとコルベールの間で会話が持たれたことも予想されるが、そのようなことも触れられていない。記述が簡単なこの理由は先に挙げたこと(滞在初期にはシャントルーは細かな記録をとっていなかった)によるものと思われる。この見学が建設用地を探すためのものであったというベルニーニの発言は 9 月 7 日になされた(Lalanne: op.cit., t.21, p.391)。

この見学について触れたデ・ロッシの手紙では、それがはっきり建設用地の探訪であったとはされていない(Mirot: op.cit., p.206)。教皇大使による記録でもそうである(Schiavo: op.cit., p.32)。おそらく、既存のルーヴル宮の敷地を再確認し、また他の敷地も見てみる、というものであったのであろう。

¹⁴ Lalanne: op.cit., t.17, p.356。

¹⁵ Flavio Chigi, 教皇特使。

¹⁶ 誰のことかわからない。コルベールであるとする上はベルニーニの 8 月 11 日の発言と矛盾する。当時一般的に大臣 ministre と呼ばれていたのは枢密院 conseil d'en haut の構成員(コルベール、ド・リヨンヌ、ル・テリエ)だったようである。

¹⁷ Lalanne: op.cit., t.21, p.391。

¹⁸ 既存のルーヴル宮に基づかず設計する可能性が当時考えられていたことは、7 月末から 8 月上旬にかけて「日記」に登場する噂でルーヴル宮のためのル・ヴォーによる設計案についてのものからも分かる(Lalanne: op.cit., t.16, p.374, t.17, p.74, 351)。そこでは既存のルーヴル宮は養禽場、大貴族の宿泊所あるいは前庭とされ、新しい建物がその近く(en la place de la cour des cuisinesとか au droit de la rue Saint-Thomas-du-Louvre とあるので、西翼の西側ということである。この通りは現在のピラジッドのあたりをバレーロアイヤルから大ギャラリーまで南北に走っていたものである)に置かれていた。フランソワ・マンサールも同じような提案をおこなっていた(Whiteley, Mary & Braham, Allan: Louis Le Vau's Projects for the Louvre and the Colonnade, in "Gazette des Beaux-Arts", LXIV, 1964, p.352, 356)。

¹⁹ Lalanne: op.cit., t.15, p.305-306.この発言は教皇大使、ヴェネツィア大使としてシャントルーの前でなされた。

²⁰ Lalanne: op.cit., t.21, pp.391-392。

²¹ 宮廷の高官達(建築とは関係ない)とコルベール。

²² Lalanne: op.cit., t.15, pp.193-194.この会話の内容はシャントルーがベルニーニから9月7日に教わったものである。

²³ Clément: op.cit., pp.261-262.コルベールは以下のように述べていた。

・王の先任者達が建てた部分を完全に残せたら王は喜ぶだろう。

・この大きな建物の4個のうち既に2.5個が作られているので、それらを完全にに取り壊してしまうというのは聞こえのよいものではないだろう。

²⁴ 王はベルニーニを丁重にもてなした反面、ベルニーニのフランス芸術に対する態度を気にしていた。9月4日、王はシャントルーに向かって、ベルニーニがフランスのものをあまり誉めようとしない、と苦情を述べている(Lalanne: op.cit., t.21, p.381)。ヴィガラニ(Charles Vigarani.フランスで働く建築家. *intendant des machines et plaisirs du roi*.Lalanne: op.cit., t.16, p.179.)は、王が以下のように述べたと述べている(Mirot: op.cit., p.224)。30分話ただけで、ベルニーニがフランスに何も良いものを見ないような偏見を持った人だと分かった。

²⁵ モデナ公爵への手紙(Mirot: op.cit., p.231)。この時点では基本的な設計は終了していた。なおヴィガラニは以下のようなことを述べている(Mirot: op.cit., p.224。どのような状況での発言かは分からない)。

・フランスに来ていきなりベルニーニは、良いものを作りたいならルーヴル宮をほとんど壊さねばならないと言った。

・その情報が王に伝わり良い印象を与えなかった。

・ベルニーニはコルベールの影響で考えを改めた。

²⁶ シャルル・ペローは、何も壊さないということはベルニーニに課せられた常に重要で基本的な条件であったはずだ、と述べている(ed.by Bonnefon, Paul: "Mémoires de ma Vie par Charles Perrault, Voyage à Bordeaux 1669 par Claude Perrault", Librairie Renouard, 1909, p.83)が、いつそのような条件が出されたのかは分からない。

²⁷ 1555年から歴代の王がそこに住んだ。その東隣は王妃のアパルトマン、両者の下階は王太后の冬のアパルトマン。王のアパルトマンの上階には王太子が、さらに上階にはコルベールが住んでいた。アパルトマンといっても公的な性格を持っており、王のアパルトマンの中で諮問会議が開かれたりした(Hautecoeur, Louis: "Le Louvre et les Tuileries de Louis XIV", p.93)。

²⁸ 真昼でも手探りでしか入れず、美しい部屋が台無しである、などと言われていたらしい(Hautecoeur: "Le Louvre et les Tuileries de Louis XIV", p.56)。

²⁹ Clément: op.cit., pp.247-248。

³⁰ Clément: op.cit., pp.246-247。

³¹ Lalanne: op.cit., t.15, p.313。ベルニーニは、雨に濡れずに馬車に乗り降りできる設備がパリで普及していないのは不可解であると言い、パリ滞在中の設計の仕事でそれを推奨した。hôtel de Lionne (Lalanne: op.cit., t.19, p.298)、テンプル修道院の住宅(Lalanne: op.cit., t.26, p.364)においてである。ルーヴル宮の中の礼拝堂の計画でも、雨が降ったときに建物に入る前にそれを振り落として靴を綺麗にできるようなポーチを造る、という提案をおこなっている(Lalanne: op.cit., t.31, p.278)。

³² Lalanne: op.cit., t.30, p.469.ベルニーニは、水が溜まれば人は入れないと答えた。

³³ Lalanne: op.cit., t.15, p.511-512。

³⁴ Lalanne: op.cit., t.16, pp.375-376。

³⁵ 1964年の発掘により、当時の既存の基礎(ル・ヴォーのもの)の跡から26cmほど北にずれた基礎の跡が見つかり、そのずれがベルニーニによる修正と見られている(Brandenburg, A. Erlande: L'identification des fondations du Bernin au Louvre, in "Bulletin de la Société nationale des Antiquaires de France", 1965, p.138)。

³⁶ Lalanne: op.cit., t.16, p.378。

³⁷ Lalanne: op.cit., t.17, p.74.この広場の東側中央からは東方向に道のがび、その道幅は広場側の端で22.4メートルであった。ただし王が8月11日に訪れた際には、広場側の端で21.4メートル、反対の端で8メートルだと説明している(op.cit., t.17, p.356)。楔形になっているのは、サン＝ジェルマン教会(道はこの教会に沿って走る)がルーヴル宮に対して斜めに建っており、左右対称性のために道の向かい側も斜めにしたためであろう。ル・ヴォーやドルベも楔形の道を計画した(Chastel, A. & Pérouse de Montclos, J. M.: L'aménagement de l'accès oriental du Louvre, in "Monuments historiques de la France", XII, 1966, p.179)。

³⁸ Lalanne: op.cit., t.17, p.77。

³⁹ Lalanne: op.cit., t.17, p.356。

⁴⁰ Lalanne: op.cit., t.17, p.357。

⁴¹ Lalanne: op.cit., t.15, p.511。

⁴² パリでの設計案を見たシャルル・ペローはコルベールに対して主入り口が小さいことを指摘し、それがル・ヴォーやその他のほとんどの建築家が陥っていた誤りと同じであることをコルベールに気づかせた、と述べている(Bonnefon: op.cit., p.61)。

⁴³ パリでの設計案の1つでは、欄干の背後に隠された屋根は南北翼の住棟部分で20度弱の勾配を持っている。なお宮廷の高官 le maréchal du Plessis は、イタリアと違ってフランスでは屋根用の美しい石材があるのだから屋根を隠すべきではないと主張した(Lalanne: op.cit., t.30, p.470)。

⁴⁴ Lalanne: op.cit., t.15, p.198。

⁴⁵ Lalanne: op.cit., t.15, p.306。

⁴⁶ Lalanne: op.cit., t.15, p.313。

⁴⁷ Lalanne: op.cit., t.32, p.183。

⁴⁸ Lalanne: op.cit., t.15, p.313。

⁴⁹ Lalanne: op.cit., t.15, p.502。

⁵⁰ Lalanne: op.cit., t.15, pp.502-503。

⁵¹ Clément: op.cit., pp.251-258.指示書の後半部分(pp.252-258)は8月19日に渡されたと考えられる。Gouldは全体が8月19日のものとしている(Gould: op.cit.,

p.65)、内容から見てそうは考えられない。2つの別な指示書が繋ぎ合わされている、とするBrauer (Brauer, Heinrich & Wittkower, Rudolf: "Bernini's Drawings", TEXTBAND, Collectors Editions, 1970, p.130)の方が正しいと考える。

⁵² Clément: op.cit., p.252.ここでは王のアパルトマンが王のパヴィリオン以外のところに置かれる可能性が示唆されているように見える。確かに図2に見られる平面でベルニーニが計画した新しい西翼は既存のものから2つの小さな中庭を隔てただいぶ離れたところに建っている。しかしこの指示書を書いた時点では新しい西翼がそのようなものになるとはコルベールは考えていなかったであろう。2重にするdoublerというのは翼の厚みを2倍にする(つまり部屋列を2列にする)ということであり、その場合それによってできた新築部分に王のアパルトマンを置いたとしても、王のパヴィリオンのアパルトマンが拡大されたことにしかならない。

⁵³ Lalanne: op.cit., t.15, p.505。「日記」には王への提出の場面そのものは描かれていないが、デ・ロッシは、王をはじめ皆が設計を賞賛したと述べている(Mirot: op.cit., p.226)。教皇大使の描写も同様である(Schiavo: op.cit., p.33)。

⁵⁴ 現フランス学士院。

⁵⁵ つまり先に触れた指示書の内容である。

⁵⁶ Lalanne: op.cit., t.15, p.510。

⁵⁷ Lalanne: op.cit., t.15, p.517.デ・ロッシは、王は非常に満足した、と述べている(Mirot: op.cit., p.233)。

⁵⁸ ここで取り上げるのはルーヴル宮の付属建築物及びその周辺の計画である。王室から依頼された設計の仕事にはそれ以外にもサン＝ドニの教会のブルボン家の墓所、ヴァル＝ド＝グラースの祭壇(王太后から依頼)、そしてサン＝クルーの滝(王弟から依頼)があった。なお王室以外からは6件の依頼があった。現存しないが、hôtel de Lionneの改築案が不完全ながら実施された(Bistoletti, Sandra Bandera: Lettura di testi berniniani; qualche scoperta e nuove osservazioni dal Journal di Chantelou e dai documenti della Bibliothèque Nationale di Parigi, in "Paragone", 429, 1985, pp.51-52)。

⁵⁹ ベルニーニの設計には南側の大ギャラリーと同じように、北側でもルーヴル宮とチュイルリー宮を繋ぐ建物が含まれている。これは大きな四角形の完成と同じく以前から考えられていた計画である。

⁶⁰ Lalanne: op.cit., t.19, p.293。

⁶¹ Clément, op.cit., p.257-258。

⁶² la sortie du Louvre, par le palais des Tuileries.「日記」の10月7日で la sortie de Paris par les Tuileries というものが話題になっているが(Lalanne: op.cit., t.28, p.267)、恐らく同じものと考えられる。

⁶³ Lalanne: op.cit., t.19, p.284.ベルニーニの説明。

⁶⁴ Clément: op.cit., p.258。

⁶⁵ Lalanne: op.cit., t.19, p.284.この建物の両方の面は全体が円形にくぼんでおり、さらにその中央部は円形に膨らんでいる、とされており(Lalanne: op.cit., t.17, p.358)、ベルニーニによるルーヴル宮の第1案と似たような構成である。

⁶⁶ ただしベルニーニの第1案の平面では小ギャラリー及び小ギャラリーとルーヴル宮本体との接続部分が取り払われて、本体(大きな四角形)だけが堀に囲まれている。ローマに送られたとされるル・ヴォーの平面では西翼が2重にされており、その新築部分ははずすついでに小ギャラリーとの接続部分も新築部分と考えて取ってしまったのかもしれない。実際には王のパヴィリオンと小ギャラリーの接続部分はル・ヴォー設計により1658年に完成していた(Hautecoeur: "Le Louvre et les Tuileries de Louis XIV", p.37)。

⁶⁷ Mirot: op.cit., p.188, 191。

⁶⁸ Clément: op.cit., pp.252-253。

⁶⁹ Lalanne: op.cit., t.30, p.469。

⁷⁰ はっきりどの壁かは分からないが、外観には表れないような方法であろう。

⁷¹ Lalanne: op.cit., t.31, p.277。

⁷² Lalanne: op.cit., t.31, pp.283-284。

⁷³ Schiavoはベルニーニが王のアパルトマンを東翼に置いた理由として、南翼が狭かったということ他に、ベルニーニにとって王のアパルトマンの位置というのは理念的な問題であり、ベルニーニの考えでは正面でも東翼が王にあふさわしい位置であった、ということ挙げている(Schiavo: op.cit., p.54,64)。

⁷⁴ Mirot: op.cit., p.271。

⁷⁵ Lalanne: op.cit., t.32, p.183。1667年にル・ヴォー、ル・ブランそしてクロード・ペローによる委員会が作成した平面(列柱付き)でも王のアパルトマンは東翼に置かれていた。Hautecoeurは、その理由は簡単で、1667年8月26日の布告でサン＝ジェルマン教会周辺の建設が禁止され、それによって大きな広場が作られ、そうしてテロや騒音を避けるはずであった、としている(Hautecoeur: "Le Louvre et les Tuileries de Louis XIV", p.170)。しかしベルニーニも広場を作るはずであったし、広場の騒音も心配されていたのである。なお広場のための住宅の買収は費用の不足で進まず、結局南翼が拡大されることになる(Hautecoeur: op.cit., pp.171-172)。

⁷⁶ Bonnefon: op.cit., pp.83-84。

⁷⁷ Lalanne: op.cit., t.15, p.502。

⁷⁸ ベルニーニは、主階以外の配置に関わるつもりはない、それはデ・ロッシがおこなう、と言った(Lalanne: op.cit., t.27, p.274)。

⁷⁹ Esmonin, Edmond: Le Bernin et la Colonnade du Louvre, in "Études sur la France des XVIIe et XVIIIe Siècles", Presses Universitaires des France, 1964, p.503。

⁸⁰ Gould: op.cit., p.120.Gouldの指摘通りだったとしても、快適性や利便性とは別に、ブライバシーが重要だった可能性がある。Hautecoeurは、王はプライベートなアパルトマンを欲し、建築家達はそのためにこたえようとしたが、ルーヴル宮はその要求にしたがって完成されはしなかった、と述べている(Hautecoeur: "Le Louvre et les Tuileries de Louis XIV", p.95)。

(2001年1月9日原稿受理, 2001年4月24日採用決定)